

川西根成柿遺跡

— 弥生時代前期環濠集落の調査 —

現地説明会資料

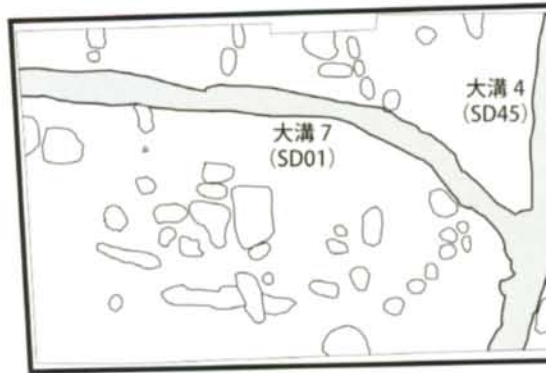


2008. 2. 16

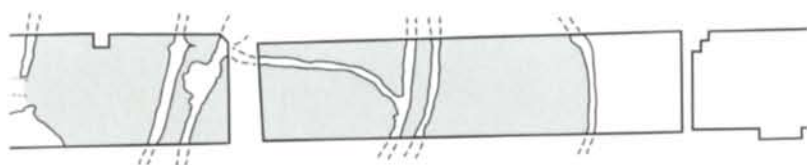
奈良県立橿原考古学研究所



1:500



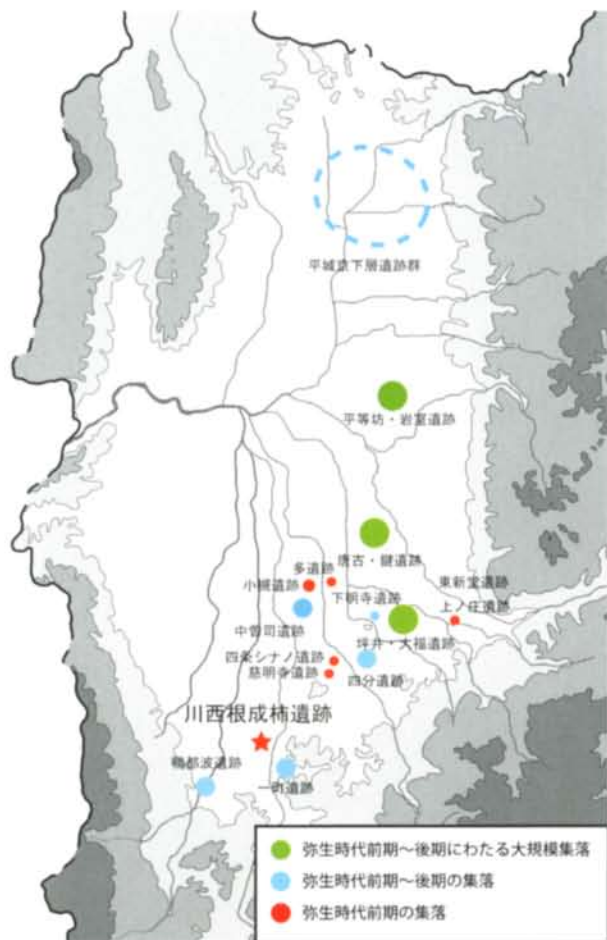
川西根成柿



〈出現段階の集落〉



〈拡張段階の集落〉



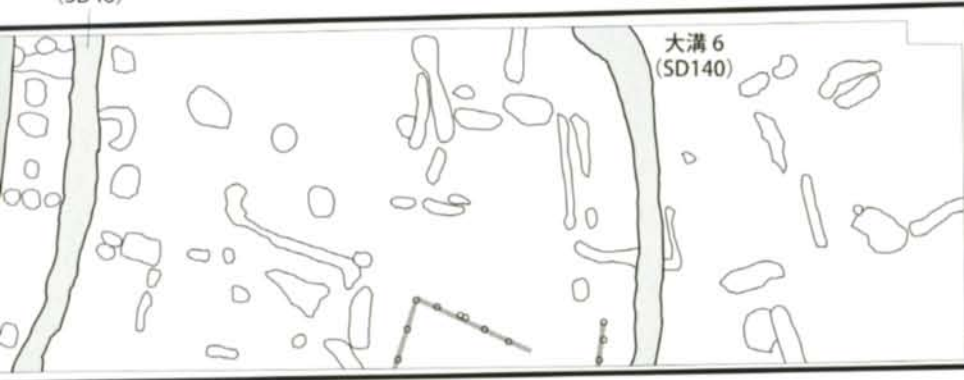
奈良盆地の主要な弥生時代前期の遺跡



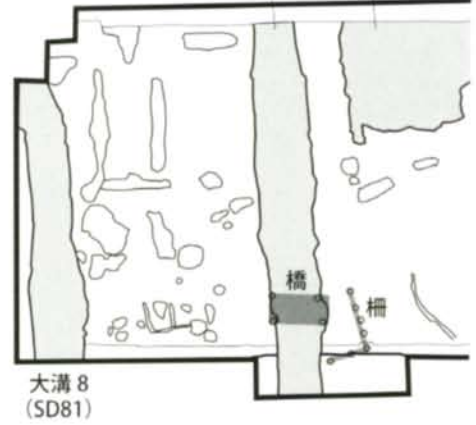
〈環濠〉

集落の南限を示す大溝 9 を南東からみたところ
(写真左奥はサヌカイト産出地の二上山)

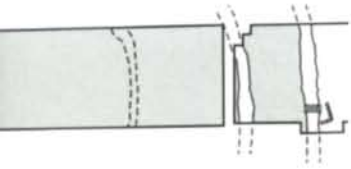
大溝 5
(SD46)



大溝 9 落ち込み 1
(SD52) (SX02)



跡の調査区



〈橋〉

大溝 9 につくられた橋脚と柵（北から）
集落の南側出入口に関わる施設



〈捨てられた遺物〉

居住域外の落ち込みに土器・石器・木製品の破損品や
製作途中品が捨てられたようす（北東から）



〈溝に捨てられた土器〉

居住域内のゴミ捨て用の穴には多量の土器が
捨てられていました（北東から）

【はじめに】

京奈和自動車道「御所区間」の発掘調査では、縄文時代の集落、弥生時代の集落・水田・墓、古墳時代や奈良～平安時代の流路などが見つかり、各時代の生活の跡や土地利用の状況が明らかになりつつあります。

今回の調査では、橿原市川西町と大和高田市根成柿にまたがる弥生時代前期（約2,300年前）の集落を確認することができました。これまで知られていなかった新発見の遺跡となるので、それぞれの地名をとって“川西根成柿遺跡”と命名しました。

【調査成果】

川西根成柿遺跡の調査では、9条の大溝や多数のゴミ捨て用の穴のほかに住居と想定される遺構などを確認しました。集落を構成するこれらの遺構の配置や特徴から、“環濠集落”と呼ばれるものに相当するといえます。環濠集落は居住域の周囲を大溝で区画する集落の形態を指し、弥生時代の大形集落によくみられるものです。出土遺物をもとに集落の様子と変遷を述べます。

集落の形成 遺跡が立地する場所は縄文時代後期頃にできた微高地上であり、周囲よりも高く安定した地盤によって洪水などの水害からも身を守る利点があります。弥生時代になって、地形的にも住みやすいこの土地を選んで集落が営まれたといえます。集落の形成をみていくと、まず居住域と想定される範囲を中心として、その南側と北側に東西方向に走る大溝がそれぞれ3条ずつめぐらされます（大溝1～6）。そして最も内側を走る大溝間を繋いだ溝（大溝7）が掘られます。これを〈出現段階の集落〉と呼ぶことにします。調査地の西には北へ向かって流れる川があり、環濠と想定される大溝はこれに取り付いているものと予想されます。雨などによってたまった水を流す水路として機能していたと考えられます。

集落の拡張 出現段階の集落に掘られた大溝群（大溝1～7）はすぐに埋められながら、それと同時に2条の大溝（大溝8・9）が新たに掘削されます。人口増加にともなって居住域が手狭になったために、居住域を南側へ拡張したのかもしれませんが。これを〈拡張段階の集落〉と呼ぶことにします。この拡張範囲には、出現段階の集落範囲であまりみられなかった特徴的な長方形の穴が多数掘られています。

また、出現段階の大溝群（大溝1～7）はこの時点で完全に埋まりきっておらず、水路としてではなく区画溝として機能していたと推定されます。つまり、居住域内の空間を区分することで目的ごとの利用をおこなっていた可能性が考えられますが、具体的な検証は今後の課題となります。拡張段階の集落では、大溝9が集落の南限を示し、そこに橋や柵などの構造物によって集落の出入口に関わる施設を設けています。集落の内と外を行き来するための通路として利用されていたと想定されます。

集落の衰退 溝や穴などの大部分の遺構は、破損した土器や石器などを捨てながら、最終的に埋められることで集落の終焉を迎えることとなります。集落の形成から衰退まで弥生時代前期という限られた時間幅のなかに収まるのが、この遺跡の特徴といえます。

生活の様相 住居や掘立柱建物などの住まいに関わる遺構は検討中のため、当時の生活の様子を出土遺物によって推測することにします。食器・調理道具としての土器のほかに、石庖丁や石斧などの石器、鍬や竪杵などの農具類である木製品が大量に出土しました。これらの製作途中のものが数多く見つかることから、集落内で製作されたことはまちがいありません。大阪府や和歌山県などの石材でつくられた石器は、頻繁な地域間の交流によって持ち込まれたものと推測されます。ここに集落を営んだ理由は、各種道具類からみると稲作農耕に必要な物資や生活必需品の材料を調達するための自然環境が良好であったためといえます。川西根成柿遺跡は当時としても大規模な農耕集落として位置づけられます。

【まとめ】

今回の調査によって、弥生時代前期の環濠集落を確認し、その様相が明らかとなりました。遺存状態は決して良好ではありませんが、稲作農耕文化が定着した頃の集落の確認は、奈良盆地はもとより全国的にみても貴重な資料であり、集落の様相がよく分かる遺跡といえます。さらに、弥生時代や後の時代に続く稲作農耕社会のあり方を考えるうえでも高く評価される遺跡といえるでしょう。

（川部浩司・福西貴彦）

◇本資料の作成にあたって、大和高田市教育委員会の発掘成果をご提供いただきました。

川西根成柿遺跡

— 弥生時代前期環濠集落の調査 —
現地説明会資料

2008年2月16日

奈良県立橿原考古学研究所

〒634-0065 奈良県橿原市欽傍町1番地 Tel. 0744-24-1101

<http://www.kashikoken.jp/>

（ホームページでも現地説明会の案内・説明内容をご覧いただけます）